

# 幕末における西洋哲学の受容に関する一考察

——西周を中心として——

今井 日出夫

近代日本の哲学について語るとき、その優れた啓蒙性故に、まず明六社における一群の知識人達の名が想起されるであろう。そこに集まり来った主要会員の大部分は、阪谷素の如き漢学者を除けば、殆どが洋学者であり、人格識見共に優れた人々であった。(1) 福沢や西、津田、加藤、西村、中村、森、神田等々、彼等を啓蒙思想家の名をもって遇することは、今日既に定着した観がある。ただし、ここに言われる如き啓蒙なる概念が、近世初頭におけるヨーロッパの新思想と、本邦における明治初年のそれと直ちに類比し得るか否かはなお吟味を要する。(2)

ところで「明六雜誌」の諸論文に見られる如く、その哲学は時事的問題と結合して考察された傾向が強いが、そもそもその結成の意図が広汎な国民的啓蒙にあった点からすれば、それはむしろ当然と言えよう。大久保氏も指摘される如く、明六社の性格は学会と云うよりは同人の自主的な自由な発言の場であり、それは同時に官僚リベラリズムの場であって、そこに明六社の明六社たるレゾン・デールがあったのである。(3) その点からすれば、維新後明治政府の再三の要請にも拘らず遂に出仕せず、「学者職分論」をもって学者の野に立つべきことを主張し、又、「瘠我漫の説」を唱えて、勝海舟、榎本武場の維新における挙措を痛論した福沢の如き存在は、明六社にあっては矢張り異色であり、立論の是非はさて置き、かかる側面からしても今日なお最大の啓蒙家と目されるのは故なきことではなからう。

しかし、事を学としての「哲学」に限定した場合、彼等の活動をも含めた明治初期「便宜上船山氏の分類に従えば才一期前期・明治元年または三年から同八年まで」は実証主義の輸入された時期(4)であり、この時期を代表する哲学者は何といっても西周である。

西の哲学的活動は明治二〇年代にまで亘っているが、哲学的 encyclopedist としての主な活動は殆どこの時期に行われており、近代日本哲学の起点を、明治三年における育英舎での彼の講義とその稿本「百学連環」に求めることが可能であろう。しかし、哲学の概念の詮義を先行せずして、近代日本哲学または日本近代哲学と近代日本における哲学とを同義に解することは許されぬ。伝統的を西欧的哲学の概念からすれば、その受容と研究は既に幕末に遡ることが可能であり、私は近代日本における哲学の出立点として西の文久年間を中心とする活動にその起点を求めらる。

啓蒙期の哲学が百科全書学派的な性質をもち、その外面的特徴の一つにいわば一種の和漢洋に及ぶ混和哲学的要素をもつ(5)とすれば、西の場合もまた典型的にその特徴を示す。幼にして祖父時雍より孝経、四書の素読を受け、十二才の頃五経は終えていたが、別に山口慎

齋、藤秀庵村出、鼠瓜生重蔵、小野寺藤太郎等に師事して、近思録、靖献遺言、蒙求、文選、左国史漢を学び、傍ら筆札を小野寺、詩賦を瓜生に受けた。<sup>(6)</sup> 後、崎門派の流を汲む藩の学統を受けて、二程全書、正蒙、語録、文集等を熟読し、徂徠、仁齋の徒を仇讎視していたところ、たまたま論語を讀んで古学に傾倒するに至った。嘉永元年（一八四八年）三月の私記に「既而得徂徠集、説未半。而十七年之大夢。一旦醒覺。願祝宋学。漢宋之間。自為鴻溝。而我身今宛如蓮花座上。其境界之別。不翹淨土与娑婆也。於是乎始知嚴毅窘迫不知平易寬大。空理無益於日用。而礼案可貴。」<sup>(7)</sup>と書き、空理の日用に無益にして礼案の貴ぶべきことを述べている。

朱子学は天地自然の理によって五倫五常といった規範を立て、そこに人間の道を説いたのであり、そこでは、堯・舜ら先王の徳治もその本体は天と天命に帰せられ、自然も人間も同じ本体に基くものとされた。これに対して徂徠は、先王の徳治を先王の制作とすることによって、自然に対する人間文化の主体性を回復した<sup>(8)</sup>のである。先王の制作たる礼楽刑政を離れて道はない。しかも、この礼楽刑政は時と所に應じて適切な形をとるべきものだとし、朱子学の空理を批判したのである。朱子学はいりまでもなく幕藩体制の思想上の支柱であり、この朱子学の徂徠学による批判が出てくる背景には、徳川封建社会そのものの動揺があった。こうした点からみれば、西の徂徠学への傾倒は、幕政の変動期にあって為政者に治政の指針を与え得る如き実理の学をめざしたものと見えよう。<sup>(9)</sup> 事実また彼の言動の多くはそれを裏付けており、かかる背景の中から、西洋哲学を求めていったのである。従って彼の眼は、常に現実の社会に向けられ、背後には実学的関心があって、その思想と生涯を大きく規定したようである。

西が洋学にふれたのは二十五才の時、嘉永六年（一八五三年）、ペリー来航の年であった。当時の騒然たる有様は彼を洋学へと駆り立てたのである。翌安政元年、脱藩という非常手段に訴えて、洋学修業に専念することを決意、実行している。そこには学者としての知的関心以上の、愛国の熱情が働いていた。それは単に西と限らず、幕末の他の多くの洋学者に認められた国家意識、いわば一種のナショナリズムとも規定し得るものであった。自ら勘当を受けて藩との絆を断った津田真道、昌平黌の机上に漢籍をひらき、抽斗の中に蘭書を入れて人の来ぬ間を窺って学んだ中村正直、アンマをしながら蘭学研究をした杉亨二、<sup>(10)</sup>時に刺客に狙われもし、幕末、維新时期を小さく目立たぬように心掛けた福沢諭吉、他、高島秋帆、佐久間象山等々、数々の類例を通して、苦難の蔭に彼等を支えた愛国の至情を讀みとることが出来る。西にあってこの脱藩は生涯の一大転機になったけれども、和魂洋才経世済民の意識は彼の思想と行動のキイ・ポイントをなすものであろう。

当時の幕府は鎖国的伝統を固守する能わず、蕃書調所を設けて、西は津田と共に安政四年（一八五七年）教授手伝並となった。そこで専攻学科の分化を通じて、東洋の性理学に匹敵する学問を西洋の文献によって研究しようとする活動が起り、ここに西洋哲学研究の端緒が開かれるに至った。従米の軍事的技術方面を主目標とした洋学からの、新傾向への転換に果した西等の役割は大きい。文久二年（一八六二年）和蘭留学の直前、友人松岡リ次郎に宛てた書簡において、洋学流行の折に水府流の攘夷説が浸潤し、浪士が騒動を起すのを批

判しており、その以前にも、安政四年（一八五七年）慶喜に上申書を奉って、黒船の背後にある西洋の制度の便と人材の乏しなることを説きつつ、北海道開拓の急務を建言している<sup>(1)</sup>。外憂を除く為には軍備の増強のみならず内政の改革の必要なることを力説し、かかる文明觀の転換に基いて洋学を求め哲学を求めていったのである。上掲松岡宛書簡において、「小生頃來西洋之性理之学、又經濟学杯之一端を窺候処、美ニ可憐公平正大之論ニ而、從來所學漢說とは頗端を異ニシ候処も有之哉ニ相寛申候、尤彼之耶蘇教杯は、今西洋一般之所奉ニ有之候得共、毛之生たる仏法ニ而、卑陋之極取へきこと無之と相寛申候、只ヒロソヒ之学ニ而、性命之理を説くは程朱ニもイッき、公順自然之道に本き、經濟之大本を建たるは、所謂王政にも勝り、合衆國英吉利等之制度文物は、彼堯舜官天下之意と、周召制典型は心ニも超へたりと相寛申候、美に由斯道而行新政、國何不富、兵何不強、人民何不聊生、祺福何不可求學術、百役何不盡精微と奉存候」（原文のママ）<sup>(2)</sup>と書いている。これによって既に西洋哲学に接していたことがわかるわけであるが、その哲学が、富国強兵、人民福利との結びつきにおいて捉えられていることがここでも理解されよう。

右の他にも、略同年のものと思われる未完の、調所において企てられたと解される哲学講義案の断片がある。ピタゴラス、ソクラテス、アリストテレスを略述し、キリスト教と哲学の区別を論ぜんとして絶えている哲学史的体裁のものであるが、哲学の語義にふれ、これを希哲学と訳して東洋の希賢の意に等しいといっている<sup>(3)</sup>。この訳語は故麻生義輝氏の指摘される如く、西と津田との哲学研究初期における別個に考え得ない程の親密な關係を意味する<sup>(4)</sup>ものであるが、明治初年、西が哲学と改めた後も津田によって用いられており、例えば明治七年、「明六雜誌」に掲載された論文「開化ヲ進ル方法ヲ論ス」の中で、津田は「…実物ニ徴シ実象ニ質シテ專確実ノ理ヲ説ク近今西洋ノ天文格物化学医学經濟希哲学ノ如キハ実学ナリ、此実学国内一般ニ流行シテ各人道理ニ明達スルヲ眞ノ文明界ト称スベシ」<sup>(5)</sup>と記している。文久二年の和蘭留学以前、西と留学運動をしていた頃のものと<sup>(6)</sup>とみられる「天外独語」の中で津田の使用した求聖学の訳語は、ここでは最早使用されていない。思想的にも、西の場合も、津田の場合も、共に、富国強兵の背後に學問があつて、それが実学であるとする共通の発想にたつていたものと考えられる。

さてしかし、本格的な哲学、社会科学の受容は、矢張り何といつても文久二年（一八六二年）より慶応元年（一八六五年）にかけての和蘭留学以降のことである。時恰も十九世紀中葉の欧州思想界は、実証主義、功利主義、自然科学主義、個人主義、唯物論等の盛行をみている。試みに主要著作を挙げてみると、一八四四年コント「実証的精神論」、一八四六年ブルードン「貧困の哲学」、一八四七年マルクス「哲学の貧困」、一八五〇年スペンサー「社会静学」、一八五一年コント「実証的政治体系」、一八五五年スペンサー「心理学原理」、ペイン「感覚と知性」、一八五九年ダーウイン「種の起源」、ミル「自由論」、一八六二年スペンサー「オ一原理」（「綜合哲学体系」才一卷）、一八六三年ミル「功利主義」等の如くである。これによつても当時の思想界の主潮流を知ることが出来るであろう。

一方、国際政治の西では、仏蘭西のナポレオン三世が華々しい國家主義政策を展開して欧州政局の主尊権を握り、國際間の威信を保つ

ていた。西は「英主比較論」において、彼をアレキサンダー、シーザー、ナポレオン一世、唐のナも継ぐもの<sup>(17)</sup>と評している。他面においては、幕府がナポレオン三世の甘言に乗じて軍資戦艦を借りんとした時、その非を痛論して、<sup>(18)</sup>既に幕藩体制を超えていたかと思われた西ではあったが、当時の隆々たる仏蘭西の国威と文化の影響をまぬがれることは出来なかったのではなかったか。和蘭において教を受けたフイセリング (Simon Vissering, 1818-88) を介し、英仏の実証主義、功利主義、コントミルの哲学の洗礼を受けて帰朝する。その他、個人的交渉は不明であるが、「人生三宝説」の中で、和蘭留学の頃の著名な哲家としてオブゾーメル (O. W. Opzoomer, 1821-92) の名を挙げている。オブゾーメルもまたコント及びミルの実証主義、功利主義に傾き、西在留の頃、その勢力は和蘭学界を風靡しており、その影響を受けたことは争われない。事実、西、津田両名帰朝後の明治初年の一般的な思想の動向、すなわち実証主義の輸入から確立への道が、西の活躍と影響によることは決定的である。しかしそれ以外に、実証主義が何故に明治初年に受容されたかの理由を求める如きは、実証的立場に立って、今後史実に則した検証に携わって解明したいと思う。

また、一方、彼の摂取した知識の内容に立入ってみる時、例えば法律、経済学についてはフイセリングの講義が役立ち、論理学についてはメンツの *A System of Logic*、哲学史は Lewes *Biographical History of Philosophy*、等<sup>(19)</sup>を採ったのである<sup>(20)</sup>。その他にも彼の遺書目録の中に相当の蔵書が確かめられる<sup>(21)</sup>。東洋の諸学に関する彼の知識の豊富さは言うまでもない。しかし、摂取した西洋の学問が、例えば明治に入ってから「百学連環」の如きものとして体系化される際、大筋においては西洋の学問に拠り乍ら西自身の解釈や東洋思想が加味され、また、一々専門書に依拠しているわけではない為、その西洋の学問の受容の仕方にはいろいろの問題が横わっている。例えばその思想の母国における学説や書物がそのまま伝えてくるとは限らぬこととか、一層根本的には、外来思想を幕末、維新期の変動、発展の中でどのようにかみ合わせ、理解すべきかといった問題がある。この点に関して私は、前者については今回ふれることが出来なかったけれども、後者を中心に、西の若き日の脱藩以来の思想と行動には、一貫したナショナルなものが根底にあるという想定の下に、儒学的教養と西洋文化への傾倒とが渾然として当時の社会的変動の中に絡み合っていたという仮説を設定し、些少の検証を試みた。より詳細に且る吟味は今後に期することとし、雑駁な叙述の筆を擱く。(県立柏木農高教諭)

(1) 麻生義輝「近世日本哲学史」二頁。

(2) 筑摩書房刊「明治文学全集3・明治啓蒙思想集」所収、大久保利謙氏の解題参照。

(3) 同右。

(4) 船山信一「明治哲学史研究」六頁。

(5) 前掲麻生「近世日本哲学史」六頁。

- (6) 大久保利謙編「西周全集才三卷」七二三頁―七二四頁。
  - (7) 鷗外全集刊行会刊「鷗外全集才十四卷」所収「西周伝」二七五頁。
  - (8) 今中寛司「徂徠学の基礎的研究」二一―三頁。
  - (9) 朝日ジャーナル編「日本の思想家Ⅰ」所収、古田光「西周／＼啓蒙期の哲学者Ⅴ」一〇九頁。
  - (10) 坂田吉雄編「明治維新史の問題点」所収、源了円「明治維新と実学思想」九八頁。
  - (11) 上掲「鷗外全集」所収「西周伝」二八二頁。
  - (12) 上掲「西周全集才一卷」八頁。
  - (13) 同右、一六一―一七頁。
  - (14) 前掲麻生「近世日本哲学史」四七頁。
  - (15) 「明六雜誌」才三号所収津田論文。
  - (16) 前掲「明治啓蒙思想集」所収、大久保氏の解題参照。
  - (17) 上掲「西周全集才二卷」三〇〇頁。
  - (18) 上掲「鷗外全集」所収「西周伝」三〇二頁。
  - (19) 大久保利謙編「西周全集才一卷」(昭和二十年日本評論社刊)三五頁、大久保氏解題参照。
  - (20) 前掲麻生「近世日本哲学史」六四頁、一二六一―一二七頁。
- 他、河野健二「福沢諭吉」、島田虔次「朱子学と陽明学」、沼田次郎「洋学伝来の歴史」、武田清子編「思想史の方法と対象し」速水  
敏二編「哲学年表」等参照。